

膵臓がん 最新治療法は 室蘭 専門医参加しセミナー



膵臓がんで生じる黄疸の症状について解説する小野医師

がんを防ごう

早期発見が難しく転移しやすい膵臓がんについてのセミナーが25日、製鉄記念室蘭病院(室蘭市知利別町)で開かれた。市民ら約50人が訪れ、膵臓がんの最新の

治療や症状を学んだ。

日本消化器病学会の専門医でもある同病院の小野道洋消化器内科主任医長が講師を務めた。

膵臓がんによる死者は全国で増え続け、患者の5年生存率が10%未満と低い。初期症状がほとんどないため、すぐに手術ができない

状態で見つかるケースが約8割を占めるといふ。

小野医師は、膵臓がんは皮膚が黄色くなる黄疸おうだんが出ることが多く、患者の4割が手術前に黄疸を治療する必要があることなどを説明した。「近年では診断と治療の両方が可能な超音波内視鏡の手術も普及してきた。腰や背中せなかの痛みで骨に異常がないときや、黄疸が出ているときは内臓の検査をしてほしい」と強調した。

肺がんの初期の手術を受けて経過を見ているサイバー(がん経験者)で、洞爺湖町の主婦池田美智子さん(60)は「がんを経験して、セミナーに出席するようになった。黄疸などちよっとした点にも気を付けたい」と話していた。

(須田幹生)